Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

141
253

141
253

唐大和上東征傳　解說

特殊人二冊

141
253

「唐大和上東征傳」解説

鑑眞和尚の傳記の古く記述されたものとしては、唐の思託の撰である鑑眞和尚東征傳三卷（或五卷、或六卷）と、淡海眞人元開撰の唐大和上東征傳一卷との二本あるのみで、他に蓮行の繪詞本十二軸（現存五軸）と、賢位の過海大師東征傳二卷とがあるも、共に鎌倉時代の編纂で、資料は前の二書より出たものに過ぎないから、鑑眞和尚傳の信憑すべき最古のものとしては、思託本と元開本との二本である。前者

昭和文庫

4
253

は唐より隨從して、前後六度の渡航に、逆旅十一年の辛酸を共にした門人思託、後者は本朝人で親しく和尚の教化を受けた元開が、共に其の親見親聞せる行狀を記述せるもので、然かも思託本は詳細に記述されあるものと推せらるゝも、惜しいかな、今日では既に佚して傳はらず、元祿年間師蠻が本朝高僧傳を編した時、參考したらしくあるも、現今では辛うじて賢位本等の記事の元開本になき資料が思託本より出たものと推測するに過ぎないのである。

茲に本會が複製せるものは元開本で、思託本の佚せる今日、和尚傳に就ては唯一の基本傳記である。版本としては早く群書類從に編入され、又單行本としては寶曆年間京都で出版されたが、東征の文字が幕府の忌避に觸れ、焚書毀梓の厄に遇ひ、現今では漸く一本が河内の高貴寺に藏せられると聞く。その後大日本佛教全書や日本大藏經に、又近くは大正大藏經に收載され、それ等には版本及び寫本の諸本を對校し校異をも附載しあるも、繙讀に便ならず。また古鈔本の存するもの鮮きを以て、今回京都帝國大學へ寄托の古梓堂文庫藏の古鈔本を原寸に複製し、唯だ用紙のみは原本の如き裴紙では兩面に影印困難であるから、良質の鳥子紙を用ゐて、字面の透映を避けて複製する事とした。

この古鈔本は卷の首尾にある藏印で知らるゝ如く、高山寺の舊藏本

4
253

で、堅緻な裴紙の兩面に書寫され、本文三十五葉と內表紙一葉とを、堅靱な厚手の紙で表紙を着け、粘葉綴に裝幀されてある。

奥書に「老後可奉施入金峯山寺可令成就現世後生之所願給」とあるのみで年時がないから、書寫の時代は明確でないが、鎌倉の末葉と見て大差なからう。奥書中にある金峰山寺は大和吉野山に在り、往時は天台眞言の二宗に屬したが、今は天台宗延曆寺末である。役の小角の開創と傳へ、もとは吉野大峰の山上山下の伽藍の總稱であつたが、幾多の興廢を經て、今は豊臣秀吉の修築せる藏王權現堂を本堂とせる一廓を金峰山寺と稱して居る。顧ふに中古は山門漸く盛大に、僧坊百餘

院を構へ、吉野大衆と稱して高野山と對抗し、後醍醐天皇の鸞輿をも迎へた程の隆盛であつたから、一般の尊信も深く、その頃、この本は當寺に書寫施入されたものと想像される。但し內表紙の一葉のみは後世の筆である。

各本と對校し校異をも附載したいと考へたが、發行の期日迫り、對校の時日なかりしため遺憾ながら割愛した。

この鈔本は必しも善本とは稱し難いが、本書の古鈔本絶無とも見るべき時、本書の複製印行は學界に多少の貢献あることを信じ、複製頒布したのである。

（昭和十一年四月佛誕生日、藤堂祐範稿）

141
253

141
253

141-253
1200701746203

唐大和上東征傳

解說付一冊

14
25

141
253

昭和十一年四月三十日印刷　第三刷
同　十一年五月　一日發行　第四回配本

編輯兼發行者　貴重圖書影本刊行會
代表者　藤堂祐範

印刷者　佐藤濱次郎
京都市新町通竹屋町南

印刷所　便利堂　中村竹四郎
京都市新町通竹屋町南

發行所　便利堂內
貴重圖書影本刊行會
頒布事務所

昭和十一年四月三十日印刷　第三期
同　十一年五月　一　日發行　第四回配本

編輯兼發行者　貴重圖書影本刊行會
代表者　藤堂祐範

印刷者　佐藤濱次郎
京都市新町頭竹屋町南

印刷所　便利堂　中村竹四郎
京都市新町頭竹屋町南

發行所　便利堂內
貴重圖書影本刊行會
頒布事務所